

# 永楽八年の役と在外衛所

——北直隸の諸衛を中心に——

The War of the 8th Year of the Yongle Era and the Local Army

川 越 泰 博

## 要 旨

明朝第三代皇帝永楽帝が行ったモンゴル親征は、前後五回にわたって漠北に親征し三度北虜を破ったのでそれを形容して「五出三摯」という。永楽帝が永楽八年（一四一〇）に最初の親征軍を起こしたのは、その前年淇国公丘福率いる明軍がモンゴル軍に大敗したからであった。親征軍を編制するために調撥された地方諸衛の衛所官軍は、永楽八年（一四一〇）二月末までに上京することを求められた。調撥の対象になった在外衛所の衛所官軍は、南京の諸衛、各地に封ぜられた諸王の王府護衛、各都司の諸衛に所属していた。永楽帝は、常山蛇勢というべき隙や欠点のない陣立てで親征に臨むために、畿内の親軍衛・京衛・在外衛所を親征軍の中核として、これに直隸・山西・山東・陝西・浙江・河南・遼東などの在外衛所官軍を組み込んだのである。これらの在外衛所から調撥されたものの多くは、靖難の役後北直隸の在外衛所から配置転換された燕王軍出身の衛所官軍であった。

## キーワード

後軍都督府、後府直隸、大寧都司、燕王軍の配転、明朝档案

## はじめに

明朝第三代皇帝永楽帝のモンゴル親征は、前後五回にわたって漠北に親征し三度北虜を破ったとして「五出三犁」と呼称されるが、その最初の親征は永楽八年（一四一〇）であった。永楽帝が親征軍を起こそうと決意したのは、その前年に淇国公丘福率いる明軍がモンゴル軍に大敗したからであった。

周知のように、元朝は洪武元年（一三六八）明軍に中国から追われてモンゴル高原に退いた。しかし順帝の崩御後もその王子たちはなお大元の皇帝を称して、帝国の維持に努めた。この時点で、北元の勢力は満州より中央アジアまでを押さえて、江南と華北を制覇したにすぎない明朝を取り囲むようにして明朝と南北に対峙していた。

ところが、第二代ハーンのトグス・テムル（脱古思帖木児）がブイル・ノール方面にいたとき、明の将藍玉に急襲されて大敗を喫し、西走の途中、トラ河畔で叛臣イエスデルのために殺された。洪武二十一年（一三八八）のことである。これによって、北元は壊滅し、クビライ裔の皇統は一時的に断絶した。

ところが、足かけ四年に及んで中国を混乱させた靖難の役は、トグス・テムルの死後、混乱期に陥ったモンゴルに復興の機会を与えることとなった。モンゴルの情勢は洪武から永楽への移行期に大きく変容したのである。モンゴル高原はその中央にゴビ砂漠が東北から西北に走り、東モンゴルと西モンゴルに分別される。その東モンゴルには北元系統のタタール（韃靼）が、西モンゴルには新興のオイラト（瓦剌）が勢力を張り、二つの対立勢力が併存していた。

当時のタタールハーンは、かつてサマルカンドのチムールのもとに身を寄せていたブンヤシリ（本雅失里）である。チムール亡き後帰国し、アルクタイ（阿魯台）に推戴されたブンヤシリは、明の招撫に従わず、永楽七年（二四〇九）八月十五日、ケルレン川において丘福が率いる明軍を破った。<sup>①</sup>翌九月五日には敗残の兵が数多く北京にたどり着き、明軍敗北の様子をこもこも具体的に報告した。<sup>②</sup>親征の準備は、その直後には早くも始まっているので、永楽帝は敗報が届いた段階において、親征の決意を固めたのであろう。

ケルレン川において敗北を喫した明軍の敗残兵の多くが北京に帰還した五日後には、永楽帝は地方の衛所に対し調撥命令を渙発している。『太宗実録』永楽七年九月己丑（二十日）の条に、

永康侯徐忠等に勅して、南京の各衛及び睢陽歸德武平鎮江等二十五衛の歩騎三万を選練し、寧陽伯陳懋は陝西の属衛及び慶秦二王府護衛の歩騎万九千を選練し、江陰侯吳高は山西及び晋王府護衛の歩騎万五千を選練せしむ。仍中都留守司河南湖広山東の三都司・周楚二王府の護衛に命じて歩騎四万五千を選び、臨洮河州岷州西寧平涼の諸衛は善戦の士官五千を選ばしむ。それぞれに鈔を賜いて行糧を給し、皆来年二月を以て北京に至り随征せしめんとす。

とあり、親征軍を編制するために調撥を命ぜられた地方の諸衛の上京期限は永楽八年（二四一〇）二月とされた。これら調撥の対象になった南京の諸衛、諸王の王府護衛、都司所属の諸衛の軍兵は歩騎併せて「十一万四千」になる。永楽帝は、こうした在外衛所の衛所官軍と畿内の親軍衛・京衛・外衛とを併せて大軍からなる親征軍を編制し、常

山蛇勢というべき隙や欠点のない陣立てをもって親征に臨もうとしたのである。このときの親征軍編制のために調撥された都司・衛所を具体的に記した史料はほとんど存在せず、上記の『太宗実録』永樂七年九月己丑（二十日）の条はきわめて貴重な史料である。とはいえ、この史料は京師以外の地方の王府護衛・都司の衛所に対して渙発された調撥命令の一節であるので、数の限定された親軍衛・京衛はともかくとしても、調撥された畿内諸衛の具体的名を知ることは全くできないという弱点がある。それは既成の編纂史料においても同様で、その具体的衛所名を検出することはむずかしい。しかしながら、親征軍編制の中核となったのは、畿内の親軍衛・京衛・外衛であるので、その場合、北直隸の在外諸衛は親征軍編制上いかなる扱いをうけたのかという興味がいささか喚起される。

そこで、本稿においては、『明朝档案』に収録された衛所官の世襲簿『衛選簿』に着目し、それを子細にみていくことで、北直隸所属の諸衛を探り出し、永樂八年（一四一〇）の役における親征軍研究の一齣としたい。

## 一 北直隸の都司とその諸衛

明代軍事制度において地方に設置されたいわゆる在外衛所は、左右中前後からなる五軍都督府（五府）の管轄下に置かれた。五府には直隸する衛所もあるが、圧倒的多数の衛所は都司に統轄され、その都司は左右中前後のいずれかの都督府に統轄された。五府と都司との関わりを簡単に説明すると、

左軍都督府——左府には直隸する衛所はなく、衛所はすべて都司に所属する。それは浙江・遼東・山東の各都司である。

右軍都督府——右府には宣州衛が直隸した。これ以外は、いずれも京師から遙かなる遠隔の地域に所在する陝西都司・陝西行都司・四川都司・四川行都司・広西都司・雲南都司・貴州都司に所属した。

中都督府——中府に所属の衛所は、本府に直隸する衛所と中都留守司所属と河南都司所属とに分かれた。ちなみに、中都留守司に所属する衛所は、鳳陽衛・鳳陽中衛・鳳陽右衛・留守左衛、長淮衛、懷遠衛、洪塘千戸所である。

前軍都督府——前府においては九江衛一衛のみが直隸する。ほかはすべて湖広都司・湖広行都司・福建都司・福建行都司・江西都司・広東都司に所属した。のちに興都留守司が加わるが、これは永樂帝のモンゴル親征が行われた永樂八年（一四一〇）当時には、未だ存在していなかった。この設置は世宗嘉靖帝のときのことである。嘉靖帝は後嗣のなかった武宗正徳帝が崩御すると、外藩興王府から入り即位したが、嘉靖十年（一五三二）、興王府のあった安陸州を昇格させて承天府とし、それを興都と呼称した。これ以後興都という呼称が通行した。その八年後の嘉靖十八年（一五三九）には、ここに興都留守司を置き、顕陵衛・承天衛（安陸衛を改称）を統轄、顕陵を守護させたのである。

後軍都督府——後府には直隸する衛所のほか、大寧都司・万全都司・山西都司・山西行都司のように京師に近い地域に都司が設置された。ただ万全都司の設置は宣徳五年（一四三〇）六月のことであり、永樂八年（一四一〇）の時点では存在していなかった。この万全都司設置以後その所属となった諸衛は、それまで後軍都督府に直隸していたので、後府直隸と大寧都司・山西都司・山西行都司所属の諸衛の総数は多数に上る。

以上、五府と都司との関係にふれたが、上記『太宗実録』永樂七年九月己丑（二十日）の条に関して都司と衛所関係で捉え直すと、まず都司としては、陝西都司・山西都司・中都留守司・河南都司・湖広都司・山東都司の名が挙

がっている。これに対して、衛所としては、睢陽・埽徳・武平・鎮江・臨洮・河州・岷州・西寧・平涼の諸衛がみえる。

これらの諸衛がそれぞれの所属している都司をみると、睢陽衛は中府河南都司、埽徳衛・武平衛・鎮江衛は中府に直隸、臨洮衛・河州衛・岷州衛は右府陝西都司、西寧衛は右府陝西行都司、平涼衛は右府陝西都司の所属である。これらの諸衛は、上記永楽帝の動員令中にみえる陝西都司・山西都司・中都留守司・河南都司・湖広都司・山東都司に加えて陝西行都司、中府に直隸する衛所をたすことになるが、後府に所属する山西都司への言及はあるものの、後府に直隸する諸衛と大寧都司に所属する諸衛の名は全くみいだせない。それを探り出すのが本稿の目的とするところであるので、まずは後論に備えて、永楽八年（一四一〇）時点における後府所属の諸衛の名称をすべて提示することにしよう。

#### A 後府直隸の諸衛

薊州衛・通州左衛・通州右衛・神武中衛・遵化衛・興州左屯營・興州右屯營・興州中屯營・興州前屯營・興州後屯營・密雲中衛・密雲後衛・開平中屯衛・涿鹿衛・涿鹿左衛・鎮朔衛・武清衛・忠義中衛・瀋陽中屯衛・大同中屯衛・天津衛・天津左衛・天津右衛・定州衛・定辺衛・真定衛・永平衛・山海衛・盧龍衛・撫寧衛・東勝左衛・東勝右衛・隆慶衛・宣府左衛・宣府右衛・宣府前衛・万全左衛・万全右衛・懷安衛・保安右衛・隆慶右衛・隆慶左衛・永寧衛・美峪所

#### B 大寧都司所属の諸衛

保定左衛・保定右衛・保定中衛・保定前衛・保定後衛・營州左屯營・營州後屯營・營州前屯營・營州右屯營・營州中屯營・茂山衛

以上のA・Bに掲出した衛所名は、牛平漢編著『明代政区沿革綜表』（中国地図出版社、一九九七年）の「後軍都督府屬京師（北直隸）在外衛所」・「大寧都指揮使司」に依拠した。この『明代政区沿革綜表』は洪武初年から明朝末までの地方政区の建置・裁并・徙治・異名・旧属などの記録である。したがって、府州県や衛所についての個々の変遷状況を知ることができる便利な工具書であるが、衛所に限って言えば、宣徳五年（一四三〇）六月に設置された万全都司所屬の諸衛は、永楽八年（一四一〇）の役時点でのその配置状況を直截反映していることにはならないので、北直隸諸衛の配置状況を永楽八年（一四一〇）の役時の状態に復原し直す必要がある。ちなみに、Aにみえる「宣府左衛・宣府右衛・宣府前衛・万全左衛・万全右衛・懷安衛・保安右衛・隆慶右衛・隆慶左衛・永寧衛・美峪所」は万全都司の設置によって後府直隸から万全都司へ配置転換された衛所である。そこで、まずは万全都司所屬の諸衛を後府直隸に戻し、永楽八年（一四一〇）以後に設置された諸衛は捨象し、永楽八年（一四一〇）時点における北直隸諸衛の配置状況を復原したのが、以上のA・Bである。<sup>⑤</sup>

## 二 北直隸の諸衛と永楽八年の役

本章では前章のA・Bにみえる衛所名を物差しとして、『明朝档案』収録の衛選簿から逐一永楽八年（一四一〇）

の役に関わった北直隸の在外衛所の衛所官名を探り出し、以下、その軍歴を衛選簿の記述に沿って概言することにする。

01 亦禿帖木兒（『明朝档案』第五〇冊、『金吾右衛選簿』盛朝輔の条、五一四頁）

宝坻県（北直隸）の人。長吉帖木兒は洪武二十年（一三八七）に帰付し、薊州衛総旗に充てられた。同三十二年（一三九九）靖難の役が始まると、鄭村垣・済南・滄州・西水寨の各会戦で活躍し薊州衛指揮同知に陞進したが、同三十四年（一四〇二）十二月肥（漚）河の戦いで陣亡した。その薊州衛指揮同知を襲いだ嫡長男の亦禿帖木兒は、靖難の役が終息すると、薊州衛指揮使に陞進した。永楽八年（一四一〇）の役では阿魯台を殺敗した功で河南都司の都指揮僉事に陞進した。

※長吉帖木兒が帰付した年次は、原文では「洪武□十年」に作り、一字空白がある。同条の二輩亦禿帖木兒の項に、「父、洪武二十年納哈出帰付赴京、充薊州衛総旗」とあり、洪武二十年（一三八七）における納哈出の明軍への投降・帰付に随行してのことであったので、「□十年」は剝離による空白であることが明白である。

※亦禿帖木兒が永楽八年（一四一〇）の役後に陞進した都指揮僉事がどこの都司であったかは原文には記されていないが、『太宗実録』永楽八年八月丙辰（二十二日）の条に、「薊州衛指揮使亦禿帖木兒・楊安・北斗奴、俱為河南都指揮僉事」とみえることで河南都司と特定できる。

02 高斌完者禿（同右書、高錦の条、五二〇頁）

三河県（北直隸）の人。父の桑赤は洪武二十年（一三八七）に軍士に充てられ、同二十三年（一三九〇）小旗に陞進した。靖難の役が起ると、済南・滄州・西水寨の各会戦での軍功で指揮僉事まで陞進した。しかし、同



三十五年（一四〇二）靖難の役の終盤に起きた小河の会戦で陣亡したので、子の高斌完者禿が跡を襲いで燕王軍に加わり、金川門の会戦に勝利すると、密雲衛指揮同知に陞進した。のちに密雲中衛に配置換えになった。永樂八年（一四一〇）には迤北に征進し静虜衛で胡寇を殺敗した功で密雲中衛指揮使に陞進した。

※密雲衛は『明史』卷九〇、兵志二、衛所、北平郡司に、「密雲衛、のちに密雲後衛と為し、後府に属す」とあり、洪武以後靖難の役終息以前には後軍都督府北平郡司所属であった。

※永樂八年（一四一〇）の役では、「静虜衛に征進」と記されているが静虜衛は存在しない。これと文字の似た衛は右軍都督府陝西都司に所属する靖虜衛があるが、本衛の設置は正統元年（一四三六）十二月のことであり、靖虜衛が静虜衛と誤写されたという可能性は全くない。とすると、静虜衛はたとえば、『明史』卷三二七、外国八、韃靼伝に、「明年（永樂八年のこと）、帝自ら五十万の衆を將て出塞す。本雅失里之を聞き懼れ、阿魯台と俱に西せんことを欲すも、阿魯台従わず、衆潰散し、君臣始めて各それ部と為す。本雅失里は西奔し、阿魯台は東奔す。帝、幹難河に追及し、本雅失里拒戦す。帝の麾下奮撃し、一呼して之を敗る。本雅失里、輜重棄て、七騎を以て遁る。幹難河は元の太祖始興の地なり。師を班して静虜鎮に至る。阿魯台に偶い、帝、之に諭して降らしむ。阿魯台来ることを欲すも、衆不可とし、遂に戦う。帝、精騎を率いて大呼して衝擊し、矢の下ること注くが如し。阿魯台、馬より墜ち、遂に大敗す。百余里を追奔し乃ち還る。冬、阿魯台の使い來りて馬を貢ず、帝之を納む」とある記事にみえる静虜鎮を誤記したのではないかと思量される。<sup>7)</sup>

### 03 戚完者禿（同右書、戚世宰の条、五四四頁）

金山の人。兄曲列兒は洪武二十年（一三八七）軍士に充てられた。同三十二年（一三九九）に靖難の役が起こ

ると、鄭村垣・濟南・西水寨・京師平定の各会戦において軍功を挙げたが、その直後に死去した。そのため永樂元年（一四〇三）にもう一人の兄察罕台が興州中屯衛正千戸を襲いだ。そして、同七年（一四〇九）における丘福のモンゴル遠征軍に組み込まれて征進したが陣没した。察罕台の親弟である戚完者禿がその跡を襲ぎ、同八年（一四一〇）の永樂帝の親征では阿魯台を殺敗して回還した。しかし凱旋後の陞進はなく、興州中屯衛正千戸のままであった。

04 宣亦禿不花（同右書、宣秉彝の条、五五六頁）

三河県（北直隸）の人。父の宣隱蒼戸はもと金山の達軍。洪武二十年（一三八七）に帰付、薊州衛の軍士に撥充された。燕王が拳兵すると、同三十二年（一三九九）には濟南の会戦の後小旗に陞進し、以後藁城、金川門の各会戦の軍功で、靖難の役が終息すると、營州中屯衛正千戸に陞進した。しかし、宣隱蒼戸は永樂五年（一四〇七）に死没したので、嫡長男の宣亦禿不花が父の衛所官職を世襲した。そして、永樂八年（一四一〇）には遼北に征し、本雅失里・阿魯台を殺敗して營州中屯衛指揮僉事に陞進した。

※金山の達軍とはモンゴルの軍士のことである。<sup>(8)</sup>

05 高成（同右書、高麒の条、五八五頁）

三河県（北直隸）の人。兄の桑赤児は洪武二十三年帰付、薊州衛の軍士に充てられ、のち小旗に陞進した。靖難の役が始まると、濟南・東昌・西水寨の各会戦を経て指揮僉事に陞進したが、同三十五年（一四〇二）小河の会戦で陣亡した。その跡を襲いだ親弟高成は金川門の会戦に参加し、永樂元年（一四〇三）密雲衛指揮同知に陞進した。同八年（一四一〇）の役においては靜虜鎮において功が有り、指揮使に陞進した。

※同右書、高麒の条の三輩高貴の項によると、「永楽十五年十一月、高貴、密雲中衛故世襲指揮使高斌完者禿の親弟に係る」とみえる。高麒の条に記された「外黄查有」<sup>9)</sup>下の記述では、「高成、旧名完者禿」とあるので、高成と高斌とは同一人物とみなしても誤りではないので、永楽八年（二四一〇）の役の後、高成（高斌）は密雲衛から密雲中衛（後府直隸）に配置転換されたようである。したがって、原文の「静虜鎮有功、陞指揮使」という文言の指揮使とは密雲中衛指揮使ということである。

06 鄭原（『明朝档案』第五一冊、『燕山左衛選簿』、鄭勲の条、三四三頁）

錢塘県（浙江）の人。もと燕山左衛軍の劉真の義男で余丁であった。燕王が挙兵すると、済南・西水寨・金川門の各会戦における軍功で鎮朔衛百戸に陞進した。そして、永楽八年（二四一〇）の役においては、迤北に征進して死没したので、嫡長男の鄭福が翌永楽九年（二四一一）に鎮朔衛百戸を世襲した。

07 張興（『明朝档案』第五四冊、『瀋陽右衛選簿』、張勲の条、三三三頁）

定興県（北直隸）の人。洪武三十四年（一四〇二）に招募<sup>10)</sup>に応じて燕王軍に組み込まれ、総旗に充てられた。洪武三十五年（一四〇三）が南京城が陥落すると、保定後衛百戸に陞進した。永楽八年（二四一〇）の役では迤北に征進し、後病故した。そのため嫡長男の張秉が同衛の百戸職を世襲した。

08 趙旺（『明朝档案』第六二冊、『歸德衛選簿』趙滂の条、一一頁）

遵化県（北直隸）の人。洪武二年（一三六九）従軍、同三十二年（一三九九）総旗に陞進すると、百戸・正千戸と続けて陞進し、同三十五年（一四〇二）東阿・汶上などのところでの軍功をもって永平衛の指揮同知に陞進した。そして、永楽八年（二四一〇）の役では胡寇阿魯台を殺敗する功有り永平衛指揮使に陞進した。

09 張發道（同右書、『皇陵衛選簿』張瑄の条、一八三頁）

滑原（北直隸）の人。旧名闕兒。洪武十八年（一三八五）小旗、同三十三年（一四〇〇）総旗に陞進。靖難の役期には西水寨・金川門の各会戦の軍功をもって真定衛正千戸に陞進した。永楽八年（一四一〇）の役においては、胡寇阿魯台を殺敗する功が有り真定衛指揮僉事に陞進した。

10 陸榮（同右書、『懷遠衛選簿』陸和の条、三一六頁）

安丘県（山東）の人。洪武元年（一三六八）充軍。燕王拳兵後は真定・鄭村埧・白溝河・西水寨・金川門の各会戦の軍功で、靖難の役が終息すると、密雲中衛の指揮使に陞進した。永楽八年（一四一〇）の役では阿魯台を殺敗する功が有り、山東都司都指揮僉事に陞進した。

11 朱成（『明朝档案』第六四冊、『福州右衛選簿』朱正色の条、二八四頁）

海州（南直隸）の人。洪武元年（一三六八）に衛所軍に入れられた義父郭得中の死後、その跡を襲いだ。靖難の役では真定・鄭村埧・濟南・西水寨・金川門の各会戦において軍功があり、密雲中衛指揮使に陞進した。そして永楽八年（一四一〇）の役では阿魯台を殺敗し山東都司都指揮僉事に陞進した。

12 司成（『明朝档案』第六五冊、『興武衛選簿』司昇の条、一九〇頁）

鳳陽府（南直隸）定遠県の人。父の司黑廝は洪武二十年（一三八七）に帰付し、翌年には総旗に陞進したが、同二十九年（一三九六）老疾のため、司成が総旗に補された。司成は燕王が拳兵すると、鄭村埧・濟南・藁城・金川門の軍功をもって永平衛指揮同知に累進した。永楽八年（一四一〇）の役では胡寇を殺敗する功によって指揮使に陞進した。

13 高興（同右書、焦銳の条、二〇七頁）

撫寧県（北直隸）の人。父塔刺海は、洪武二十年（一三八七）に帰付し永平衛軍に編充された。靖難の役が起ると、濟南・滄州・東昌の各会戦に参加し、東昌の会戦で陣亡した。その跡を襲いだ高興は同三十四年（一四〇二）には西水寨にて戦い、翌年には長江を渡江し金川門の会戦で陞進し、山海衛の百戸に陞進した。永楽八年（一四一〇）の役では沙漠の玄冥河に征進、本雅失里・胡寇阿魯台を殺敗し山海衛副千戸に陞進した。

※親征軍が永楽八年（一四一〇）の役に際して征進した玄冥河は、王圻の『統文獻通考』卷一三、田賦考一三、河渠下、外夷、韃靼に、「玄冥河 旧名幹難河」とみえ、幹難河が改名されたことがわかる。その改名は、『太宗実録』永楽八年五月壬午（十六日）の条に、「五原峯に駐蹕す。都督薛祿に命じて幹難河の山川を祭り、名玄冥河を賜う」とあり、永楽八年（一四一〇）の役の最中のことであった。玄冥河と改名された幹難河は、中国史料では鄂諾河・鄂嫩河・敖嫩河などと表記されるが、この河川はモンゴル人民共和国東部を流れるオノン川である。前掲『明史』韃靼伝には「幹難河は、元太祖の始めて興る地なり」と記されている。

14 張林（『明朝档案』第六五冊、『大寧中衛選簿』、張子中の条、二九四頁）

香河県（北直隸）の人。旧名は道駟、洪武二十年（一三八七）薊州衛総旗に充てられる。同三十二年（一三九九）に燕王が拳兵すると、雄県・濟南・西水寨・金川門の各会戦の軍功をもって指揮同知に陞進し、永楽八年（一四一〇）の役の際には静虜鎮において功が有り指揮使に陞進した。

※二輩張信の項によると、長男の張信が張林の老疾のために指揮使を世襲すると親軍衛の金吾右衛に併合されているが、張林が永楽八年（一四一〇）の役後に陞進した指揮使とは、洪武二十年（一三八七）に総旗に充て

られた薊州衛の指揮使であろう。

15 王義那那哈（同右書、王莽の条、二九八頁）

宛平県（北直隸）の人。父王観童は洪武二十年（一三八七）帰付、永平衛指揮同知に除せられたが、翌年には都指揮僉事に陞進している。王観童が永楽三年（一四〇五）に病故すると、嫡長男の王義那那哈が跡を襲ぐが、都指揮僉事は一代限りの流官であるので、永平衛指揮同知を世襲した。永楽八年（一四一〇）の役では胡寇を殺敗し永平衛指揮使に陞進した。

※王観童が将帥として二十四年間過ごした期間に挟まれた靖難の役期の事蹟については全くふれるところがない。王義那那哈が世襲したのは永平衛指揮同知であるので、王観童の衛籍は永平衛にあったものと考えられる。その故、少しも靖難の役の事蹟に関わる記事がないのは奇異である。そこで、靖難の役の際に燕王軍であったのか、それとも建文政府軍であったのかを識別する指標となる新官・旧官システムを適用しそれを窺見することにする。靖難の役が終息し、永楽政権が発足すると、「武職新旧官襲替法」が永楽元年（一四〇三）に發布された。これによって、洪武三十二（一二九九）―三五五年（一四〇二）における靖難の役（奉天征討）において、燕王の麾下として活躍した衛所官は新官、洪武三十一年（一三九八）以前ならびに永楽元年（一四〇三）以後に功労ある衛所官は旧官と分断された。その結果、衛所官の子孫の優給や襲職年齢・比試の有無、職官を継承する男子がいけないときの本人、あるいは妻子などへの優養制の施行に際しては新官と旧官とは、その処遇に大差がつけられたのである。上記『大寧中衛選簿』、王莽の条には優給舎人に関わる記事は一件もないが、幸いなことに跡継ぎがおらず故絶した衛所官の家を対象にした優養制度に関わる記事として、九輩王相の項の欄外に、

「万曆十二年四月、王二姐、年九歳、宛平県の人、大寧中衛故指揮同知王拳の親女、戸に承襲するの人無し、例に照らして月ごとに俸五石を与えて優養し十四歳もて之を住む」とある。王観童の子孫は、永平衛→武成後衛<sup>16</sup>→大寧中衛と移衛しているが、王二姐の実父王拳は大寧中衛指揮同知であったが、男子の跡継ぎがいなかった。そのため実の娘の王二姐が経済的に困窮しないように優養され、九歳のときから十四歳になるまで毎月米五石が支給されたのである。永楽以降の優養制度では、旧官の娘への支給は十四歳まで、新官の娘は結婚までと規定されているので、王拳は旧官の子孫ということになり、その祖王観童は永楽元年（一四〇三）以後、旧官の枠に入られたことが知られる<sup>17</sup>。たしかに王観童は永平衛の指揮同知であり、洪武二十一年（一三八八）に都指揮僉事に陞進した。都指揮僉事はどこの都司であるのか不明であるが、その都司は靖難の役期には建文政府軍に付したか、それとも無縁であったかのいずれであろう。それが燕王軍に加わった永平衛に衛籍がありながら、王観童の子孫が旧官として処遇された理由と思量される。なお、王観童が病没した永楽三年（一四〇五）の出来事として、『太宗実録』永楽三年十一月己酉（十七日）の条に、「故都指揮僉事王観童の子忠に命じて金吾前衛指揮僉事を襲がしむ」とみえる。名前は同じではあるが、世襲者の姓名・世襲の衛所名とともに王観童の嫡長男王義那那哈の事例と相異しているのので、同名異人なのであろう<sup>18</sup>。

16 陳貴（『明朝档案』第六六冊、『富峪衛選簿』陳淮の条、二七頁）

懷遠県（南直隸）の人。旧名真保。父陳留兒は甲辰年（一三六四）に帰付し、洪武二年（一三六九）永平衛に調され、同九年（一三七六）小旗に選充された。その死後、陳貴が補役され、洪武三十三年（一四〇〇）以後、濟南・西水寨・金川門の各会戦の軍功によって永平衛正千戸に陞進した。永楽八年（一四一〇）の際は胡寇征勦に

功有り永平衛指揮僉事に陞進した。

17 潘美（同右書、『忠義前衛選簿』潘潤の条、二〇七頁）

高麗の人。父の潘咬住は洪武二十一年（一三八八）帰付し、会州衛の百戸に除せられ、翌年には大寧衛に調査された。その後老のため嫡長男の潘美が替って百戸となった。潘美は同二十八年（一三九五）に營州左護衛に調査され、靖難の役が始まると、濟南・西水寨・京師平定の各会戦の軍功によって營州左護衛指揮同知に陞進したが、のちに隆慶左衛に移衛された。永樂八年（一四一〇）の役では阿魯台攻略の功で隆慶左衛指揮使に陞進した。

※大寧衛は洪武二十年（一三八七）八月二十四日に設置されたが（『太祖実録』洪武二十年八月辛未の条）、同年九月に左右中の三衛に分置され、ついでまた前後二衛が置かれ、同二十八年（一三九五）四月には、大寧王朱權（太祖第一七子）の之国に伴い、營州左・右・中の三護衛に改編された。そして、永樂元年（一四〇三）に削除された（『明史』卷四十、地理志、京師、北平行都指揮使司）。したがって、潘美の所屬が大寧衛から洪武二十八年（一三九五）に營州左護衛に変わったのは他衛からの移衛ではなく、大寧衛自体が幾度も改編されて營州三護衛に改称されたため、その折りに營州左護衛に配属されたのである。

※隆慶左衛は隆慶元年（一五六八）に隆慶帝の名を避けて延慶左衛と改称された。後府万全都司所屬。

18 白敬（同右書、『忠義前衛選簿』白欽の条、二二九頁）

山後上都の人。旧名鎖兒。洪武二十一年（一三八八）帰付、翌年大寧左衛、同二十八年（一三九五）には營州左護衛所屬となった。同三十二年（一三九九）における燕王拳兵以後は、濟南・西水寨・齊眉山・靈壁の各会戦の軍功をもって營州左護衛の一軍士から隆慶左衛の正千戸に陞進した。永樂八年（一四一〇）の役においては、



静虜鎮において胡寇阿魯台を殺敗する功によって隆慶左衛指揮僉事に陞進した。

※白敬の所属衛所の変更は、17潘美と同様に他衛からの移衛ではなく、大寧衛の兵力がその後離析されてその一部が大寧左衛、さらに營州左護衛に改編改称された結果である。

19 安福全〔『明朝档案』第六七冊、『永平衛選簿』安祐の条、二二七頁〕

遼陽の人。洪武二十年（一三六九）永平衛に編充された。靖難の役では同三十四年（一四〇一）の単家橋、翌年の金川門の各会戦の功で永平衛正千戸に陞進した。永楽八年（一四一〇）に永楽帝のモンゴル遠征では「迤北擒胡」に功有り永平衛指揮僉事に陞進した。

20 張庸〔『明朝档案』第六七冊、『永平衛選簿』張九卿の条、四七三頁〕

魚台県（山東）の人。父張林は丙午年（一三六六）四月に帰付、洪武二十三年（一三九〇）残疾により、子の張庸が替わって軍士となった。同三十三年（一四〇〇）から燕王軍に随行し、夾河・藁城・西水寨・小河・靈壁・京師平定などの各会戦で軍功を重ね、靖難の役が終わると、隆慶衛副千戸に陞進した。永楽八年（一四一〇）の役では迤北に征進したが、残疾のため陞進には与らなかつた。

21 劉江〔『明朝档案』第六八冊、『德州衛選簿』劉保の条、九六頁〕

灤県（北直隸）の人。父劉三は洪武二年（一三六九）に軍士に充てられ、後に劉江が替わって軍士となったが、燕王が拳兵すると、同三十三年（一四〇〇）以後濟南・西水寨・京師平定の各会戦の軍功で薊州衛正千戸に陞進した。そして、永楽八年（一四一〇）の役では玄冥河において阿魯台を破り薊州衛指揮僉事に陞進した。

22 李広〔同右書、李芳の条、一〇三頁〕

遷安県（北直隸）の人。洪武二十一年（二三八八）永平衛軍に充てられ、翌年小旗に陞進した。靖難の役が始まると、真定・濟南・西水寨・金川門などの各会戦における軍功で永平衛正千戸に陞進した。永樂八年（二四一〇）の役では靜虜鎮等処で功有り永平衛指揮僉事に陞進した。

23 季失林台（『明朝檔案』第六八冊、『營州中屯衛選簿』、季承胤の条、一〇四頁）

山後の人。父阿老丁は洪武二十一年（二三八八）大寧前衛の小旗に充てられたが、同三十三年（二四〇〇）に死没した。その時百戸に陞進していた。その百戸を世襲して燕王軍に加わった子の季失林台はとくに京師平定戦で活躍し大寧前衛指揮同知に陞進した。永樂八年（二四一〇）の役では胡寇阿魯台を殺敗し大寧前衛指揮使に陞進した。

24 亦禿不花（同右書、宣廷顔の条、一一〇頁）

三河県（北直隸）人。父穩答戸はもと金山達軍。洪武二十年（二三八七）帰付し薊州衛軍に撥充された。燕王が拳兵すると、濟南・藁城・金川門の各会戦の軍功により營州中屯衛正千戸に陞進した。永樂五年（二四〇七）に死没したので、同三年（二四〇五）嫡長男の亦禿不花が營州中屯衛正千戸を世襲した。同八年（二四一〇）には迤北に征進して本雅失里・阿魯台を殺敗し營州中屯衛指揮僉事に陞進した。

※穩答戸の没故が永樂五年（二四〇七）、亦禿不花が營州中屯衛正千戸を世襲した年次が永樂三年（二四〇五）であるならば、ここには明らかに齟齬がある。穩答戸の没故年次、もしくは亦禿不花の世襲年次のどちらかに誤記があるのかを確認すると、同条の二輩亦禿不花の項に、「永樂六年五月、亦禿不花、營州中屯衛前所故正千戸穩答戸の嫡長男に係り、世襲正千戸を敬襲す」と記されているので、亦禿不花が營州中屯衛正千戸を襲いだ

のは永樂六年（一四〇八）であり、永樂三年（一四〇五）と記されているのは明白な誤記である。

25 盧源『明朝档案』第七四冊、『鷹揚衛選簿』、盧鎮の条、二七六頁

山後大寧高州の人。父盧大は洪武二十一年（一三八八）帰付、大寧前衛軍に入れられたが、まもなく没した。そのため嫡長男の盧源が替わって大寧前衛軍に補充された。靖難の役が始まると、白溝河・済南・夾河・藁白・西水寨・京師平定の各会戦に参加し、大寧前衛正千戸に陞進した。その後永樂八年（一四一〇）の役では阿魯台殺敗の功有り大寧前衛指揮僉事に陞進した。

### 三 北直隸諸衛と永樂八年の役（承前）

以上に掲出した二五の諸事例は、永樂八年（一四一〇）における永樂帝のモンゴル親征に従行したことが明白な北直隸の諸衛である。永樂朝以前においては後府所属の在外衛所は、既述したように北平都司・北平行都司・山西都司・山西行都司・北平三護衛、山西三護衛のどこかに所属した。しかしながら靖難の役終息後永樂政權が成立し、都が北京に移されると、大規模な都司・衛所の改編が行われ、そのお膝元にある北直隸の都司・衛所は後府の直隸か大寧都司・万全都司のいずれかに所属することになった。北平行都司は大寧都司に、北平三護衛の燕山左護衛・右護衛・中護衛はそれぞれ親軍衛に昇格し、金吾左衛・金吾右衛・羽林前衛と改称された。万全都司の設置は前にふれたように宣徳五年（一四三〇）六月であったので、永樂八年（一四一〇）の時点では、北直隸の在外衛所は後府直隸か大寧都司所属かのどちらかに所属した。それらの衛所から一回目の永樂帝のモンゴル親征と関わりのある事

例を衛選簿から検出するにあたっては、第一の要件は「永樂八年」という年次を有することである。これに付随して、「迤北征進」・「殺敗阿魯台」・「殺敗阿魯台・本雅失里」・「静虜鎮」などの文言を有することを第二の要件とした。<sup>14)</sup> 上記の文言があっても、「永樂八年」という年次を随伴していないと、それが一回目の親征とそれ以後の年次の親征と明確な区別ができないので、年次の記載は絶対条件である。このような一定の縛りをもって検出したのが「二北直隸諸衛と永樂八年の役」に列挙した諸事例である。これらの諸事例に関わる記述は補説も付加したことによっていささか詰曲になったので、以下においては、【A】永樂帝一回目の親征随行者名、【B】当人の出身地、【C】本親征前後の所属衛所及び職官の異動、【D】本戦役以前のその家の戦歴にそれぞれ分けて整理することにする。

表一

01	亦禿帖木兒	宝坻県	薊州衛指揮使↓河南都指揮僉事	(父長吉帖木兒) 鄭村垣・濟南・滄州・西水寨・肥河(陣亡)				
02	高斌完者禿	三河県	密雲中衛指揮同知↓本衛指揮使	(父桑赤) 濟南・滄州・西水寨、(高斌完者禿) 金川門				
03	戚完者禿	金山	興州中屯衛正千戸	(兄曲列兒) 鄭村垣・濟南・西水寨・京師平定、(兄察罕台) 永樂七年陣没				
04	宣亦禿不花	三河県	營州中屯衛正千戸↓本衛指揮僉事	(父宣隱荅戸) 濟南・藁城・金川門				
05	高成	三河県	密雲衛指揮同知↓本衛指揮使	(兄桑赤兒) 濟南・東昌・西水寨・小河、(高成) 金川門				
06	鄭原	錢塘県	鎮朔衛百戸(陣没)	濟南・西水寨・金川門				
07	張興	定興県	保定後衛百戸(病故)	南京城				

永樂八年の役と在外衛所

25	盧源	山後大寧高州	大寧前衛正千戸↓本衛指揮僉事	白溝河・濟南・夾河・藁白・西水寨・京師平定
24	亦禿不花	三河県	當州中屯衛正千戸↓本衛指揮僉事	(父穩答戸) 濟南・藁城・金川門
23	季失林台	山後	大寧前衛指揮同知↓本衛指揮使	京師平定
22	李広	遷安県	永平衛正千戸↓本衛指揮僉事	真定・濟南・西水寨・金川門
21	劉江	灤県	薊州衛正千戸↓本衛指揮僉事	濟南・西水寨・京師平定
20	張庸	魚台県	隆慶衛副千戸	夾河・藁城・西水寨・小河・靈璧・京師平定
19	安福全	遼陽	永平衛正千戸↓本衛指揮僉事	单家橋・金川門
18	白敬	山後上都	隆慶左衛正千戸↓本衛指揮僉事	濟南・西水寨・齊眉山・靈璧
17	潘美	高麗	隆慶左衛指揮同知↓本衛指揮使	濟南・西水寨・京師平定
16	陳貴	懷遠県	永平衛正千戸↓本衛指揮僉事	濟南・西水寨・金川門
15	王義那那哈	宛平県	永平衛指揮同知↓本衛指揮使	
14	張林	香河県	薊州衛指揮同知↓本衛指揮使	雄県・濟南・西水寨・金川門
13	高興	撫寧県	山海衛百戸↓本衛正千戸	金川門 (父塔刺海) 濟南・滄州・東昌(陣亡)、(高興) 西水寨・
12	司成	定遠県	永平衛指揮同知↓本衛指揮使	
11	朱成	海州	密雲中衛指揮使↓山東都司都指揮僉	真定・鄭村垣・濟南・西水寨・金川門
10	陸栄	安丘県	密雲中衛指揮使↓山東都司都指揮僉事	真定・鄭村垣・白溝河・西水寨・金川門
09	張発道	滑県	真定衛正千戸↓本衛指揮僉事	西水寨・金川門
08	趙旺	遵化県	永平衛指揮同知↓本衛指揮使	東阿・汶上

表一によって窺見されるように、現存の衛選簿から検出できる永楽八年（二四一〇）の役參陣の北直隸所属在外衛所の事例はきわめて少ないことが知られる。だが、現在伝存している北直隸所属の衛選簿自体は決して少ないというわけではない。密雲後衛・興州左屯營・永平衛・盧龍衛・延慶衛の五衛（以上、後府直隸）の衛選簿は『明朝檔案』第六七冊に、保定左衛・保定中衛（以上、後府大寧都司所属）の二衛選簿は第六八冊に、さらに保定前衛・營州中屯衛（以上、後府大寧都司所属）の二衛選簿は第六九冊に収録されている。これら北直隸の衛選簿に、他の地域の衛選簿を加えれば、総計一〇二の衛選簿が現在悉皆できる。それにもかかわらず、永楽八年（二四一〇）の役に関わる北直隸の在外衛所の事例は二五件しか検出できないのである。

その一方では、京師の親軍衛の一つである金吾右衛の『金吾右衛選簿』（『明朝檔案』第五〇冊）には永楽八年（二四一〇）の役參陣者に関して六四事例が残されている。金吾右衛とは、燕王軍の中核をなした燕山右護衛が永楽政權成立後に改名されて親軍衛に昇格した衛である。<sup>15</sup>『金吾右衛選簿』におけるかかる永楽八年（二四一〇）の役關係者の残存状況を勘案すると、密雲後衛・永平衛・營州中屯衛・興州左屯營衛・盧龍衛・延慶衛・保定左衛・保定中衛・保定前衛の各衛選簿において、永楽八年（二四一〇）の役に関わる關係事例がきわめて僅少であるということは、一定程度永楽八年（二四一〇）の役と北直隸の在外衛所との関わりの薄さを反映していると思量される。つまり、北直隸所在の金吾右衛をはじめとする親軍衛・京衛が親征軍編制上においてその中核となったために、北直隸の在外衛所まで根こそぎ親征軍に調撥したならば、京師の軍事防衛体制が空洞化してきわめて脆弱になることを懸念し、北直隸の在外衛所からは大々的な調撥はせず温存したのではないかと考えられる。「はじめに」において既述したように、永楽七年（一四〇九）九月二十日に渙發された勅書だけをみて、南京の諸衛、諸王の王府護衛、そして北直隸

以外の都司所属の諸衛の歩騎併せて「十一万四千」にも上る衛所官軍が永樂八年（一四一〇）二月を期して赴京を命じられているのは、いわば北直隸の在外衛所を温存する代替として、京師から遠く離れた現在の陝西・甘肅地方などの地域にも調撥命令が下されたということではないだろうか。永樂帝が親征軍編制のための衛所官軍調撥は、上記の地域だけにとどまるものではなかった。たとえば、遼東は靖難の役期に反燕王を旗幟鮮明にし燕王軍と各地で角逐したため、<sup>16</sup>永樂帝は靖難の役終息直後からその取り込みを図ったが、その遼東にも動員令が下された。『朝鮮王朝実録』太宗十年春正月癸未（十六日）の条には、

義州通事李龍、遼東より還りて言えらく、遼兵一万北京に赴くに、達達軍に山海衛において遇いともに戦いて大敗し、死傷半ばを過ぐ。遼東、正月初二日より兵を厳しくして城守し、昼夜懈らず、と。

とある。これは明側の『太宗実録』にはみえないことであるが、義州通事からの確報として朝鮮王朝側の史料に記されているのである。朝鮮王朝の太宗十年とは明の永樂八年（一四一〇）である。遼東軍はこの年の初頭に赴京途中山海関においてモンゴル軍と遭遇し大敗を喫したという。『朝鮮王朝実録』が伝えるこのときの遼東軍の赴京は、永康侯徐忠等に下された動員令に記されたのと同じ二月北京到着を目指してのことであったであろう。遼東軍が永樂帝の親征軍に加わるために赴京するにあたっては、このような事態も生じたが、遼東軍の永樂帝親征従行の事例は『三万衛選簿』に散見する。<sup>17</sup>

永樂帝が一回目のモンゴル親征軍を編制するにあたって動員令を下した地域が広い範囲にわたっていたことは、

これまでの既述でほぼ明白となった。誤解が生じないようにいえば、そのとき動員された衛所は全衛まるごと調撥されたわけではない。個々の衛所はその構成員たる衛所官軍（衛所官と衛所軍）の中から選抜して親征軍に送り出したのである。そのとき選抜の対象になった衛所官軍は、表一から窺見されるように、靖難の役において勝利を導いた旧燕王軍である。それらの人々は前述のごとく、永楽政権成立以後「新官」としてさまざま優遇措置をうけた人たちであった。表一の二五事例の中で唯一靖難の役期に建文政権軍と戦った会戦名を欠如する15王義那那哈は、既述したように、もともと宛平県（北直隸）の人で、父王観童は洪武二十年（一三八七）帰付、永平衛指揮同知に除せられたので、本来ならば燕王軍の一員として活動する立場であった。しかし、その翌年に都指揮僉事に陞進したことで、燕王軍との関係が薄弱となったと思われる。王観童が陞進した都指揮僉事がどこの都司であるのか明白でないが、王観童の後裔が「新官」ではなく、「旧官」の処遇をうけたことによって、王観童の立場は建文政権軍に与したか、それとも無縁であったかのどちらかであろう。そのため、王観童が病故すると、その跡を襲いだ嫡長男の王義那那哈は「旧官」であったのである。この王義那那哈の事例を除くと、永楽八年（一四一〇）の役において親征軍に編制された北直隸在外衛所からは、圧倒的に旧燕王軍出身者が選抜されたことになる。これは特段北直隸在外衛所に限定してのことではない。現在『明朝档案』に収録された一〇二の衛選簿に散見する永楽八年（一四一〇）の親征軍に組み込まれた在外衛所の事例は、遼東一〇事例、山西六事例、浙江一事例、河南四事例、陝西一〇事例、山東一三事例、南直隸一七事例が検出される。この内、遼東・陝西の各一事例を除くと、ほかはすべて靖難の役に際して燕王軍として活動した実績を有する衛所官たちである。これは永楽帝のモンゴル親征に際して調撥の対象になった地方都司所属の衛所官軍が主として旧燕王軍であったことを示している。このように各地方に旧燕王軍が散



在していたのは、靖難の役後に行われた大規模な衛所官軍の配置転換による移衛の結果であった。

『明史』巻九〇、兵志二、衛所を繙読すれば明白なことであるが、洪武二十六年（一三九三）時点での都司・衛所体制は、都司一七、留守司一、内外衛三二九、守禦千戸所六五であった。それが永楽政権成立以後は都司二一、留守司二、内外衛四九三、守禦屯田衛牧千戸所三五九に増加した。靖難の役終息後に行われた衛所改革がその始まりであった。都司・衛所改革は、燕王つまり永楽帝が新政権の樹立にあたって洪武・建文二朝を支えた衛所制度を一度解体し、それを新政権の支えとすべく再編成しようとしたものであった。かかる衛所制度の解体と再編成は、組織的には新都北京を中心に設置された親軍衛・京衛と在外衛所の大幅な増設や都司とその所属衛所との統属関係の再編成であり、人的には大がかりな衛所官軍の配置転換であった。とくに旧燕王軍の配置転換による移衛は全国的規模で、建文帝の遺産である膨大な在外衛所を取り込むための人事政策であった。

その故にそれまで明代軍事体制の扇の要であった南京には、北直隸など華北の地域出身者の旧燕王軍が多数送り込まれてきた。永楽八年（一四一〇）の役において南直隸所在の在外衛所から親征軍に調撥された上記の一七事例の、靖難の役を挟んでの所属衛所の異動を示したのが、つぎの表二である。表中の【A】一回目の親征随行者名、【B】当人の出身地、【C】靖難の役前後のその家の所属衛所及び職官の異動、【D】靖難の役期におけるその家の戦歴、【E】典拠である。

表一

	【A】	【B】	【C】	【D】	【E】
01	李通	通州	通州衛軍↓揚州衛副千戸	白溝河・濟南・夾河・京師平定	五〇―四九
02	李興	宛平県	↓邳州衛副千戸	濟南・西水寨・靈璧・京師平定	―四三三
03	楊春	鄆県	↓大河衛正千戸	濟南・藁城・京師平定	五二―二七
04	朱彬	宣城県	↓揚州衛副千戸	濟南・藁城・京師平定	―三七
05	施雲	潛山県	↓武平衛副千戸	白溝河・夾河・応天府	五三―二三
06	楊玉	香河県	大興左衛軍↓安慶衛副千戸	白溝河・藁白・金川門	五四―二〇五
07	傅顕	寿州	↓六安衛正千戸	鄭村埧・藁城・京師平定	五五―三〇〇
08	劉子敬	宛平県	燕山右護衛軍↓滁州衛正千戸	白溝河・夾河・応天府	―三〇三
09	陸得山	沐陽県	濟州衛百戸↓水軍左衛正千戸	白溝河・小河・金川門	五六―九八
10	張永	山後	↓蘇州衛副千戸	濟南・西水寨・京師平定	六一―八二
11	梅亮	黃岡県	↓儀真衛百戸	濟南・西水寨・応天府	六二―三三三
12	劉斌	龍山県	↓孝陵衛指揮同知	濟南・藁城	六四―二八一
13	李斌	公安県	蔚州衛百戸↓淮陽衛指揮同知	西水寨・京師平定	六六―二〇九
14	劉瑀	山後	↓太倉衛正千戸	濟南・西水寨	六七―七四
15	侯保	安陸県	↓六安衛正千戸	真定・鄭村埧・濟南	七三―三六二
16	孟斌	薊州	↓滁州衛副千戸	白溝河・夾河・京師平定	七四―三三三
17	朱旺	滁洲	↓滁州衛正千戸	濟南・蔚州・金川門	―二八五

【備考】12劉斌の出身地龍山県は明代の行政区画にはなく、古名であった。『読史方輿紀要』卷一八、直隸九、万全都指揮使司によると、營州故城及び潭州城にはそれぞれ往昔の時代に龍山県が設置されたとする。

永樂八年（一四一〇）のモンゴル親征軍中の衛所官軍で、靖難の役後南直隸の在外衛所に配置転換された人々の出身地をみると、北直隸01、02、06、08、12、16（六例）、山東03（二例）、湖広04、11、13、15（四例）、南直隸05、07、09、17（四例）、山後10、14（二例）という内訳になる。この中で、靖難の役以前の所属が判明するのは、01通州衛、06大興左衛、08燕山右護衛、09濟州衛、13蔚州衛のわずか五例のみである。通州衛・大興左衛・燕山右護衛（後の金吾右衛）・濟州衛は永樂帝の衛所改革によって親軍衛に昇格した。つまり燕王軍の中核をなす衛所であった。蔚州衛は山西行都司所屬であったが、洪武三十三年（一四〇〇）正月一日に蔚州が燕王軍に攻撃されたときに投降し、以後燕王軍に組み込まれて永樂政權成立に貢献した。13李斌の原文を載せる李景の条には、「兄李庸、旧名株、赴京して蔚州衛右所世襲百戸に除せられる。三十三年帰順し本所副千戸に陞せらる」と記され、李斌の兄李庸が洪武三十三年（建文二）に帰順しているが、これは蔚州衛自体の投降に伴ってのことであった。

このわずかな事例を取り上げただけでも、永樂帝が靖難の役で活躍した麾下の衛所官を南直隸に投入し、その取り込みを図ったことが知られよう。選抜にあたっては、北直隸・山東・山後の人のほかに湖広・南直隸を本貫地とする衛所官も含まれている。湖広・南直隸出身者それぞれの家の始祖の来歴をみると、17朱旺の始祖朱得興が甲午年（一三五四）に朱元璋軍に入れられた以外は、いずれも洪武初年に明軍に充軍されている。かれらは元朝勢力が残余する北直隸に動員され、やがて洪武帝の崩御後靖難の役が起きると、燕王麾下として働き、その終息とともに南京を取り込むために南直隸に配置転換されたのである。

このような事情で、永樂八年（一四一〇）の親征軍に選抜された衛所官たちには北直隸以外の地域出身の旧燕王軍が多く含まれているのである。それは永樂帝の衛所改革における配置転換の結果であった。したがって、永樂八年

(二四一〇)の役のモンゴル親征軍中に北直隸の在外衛所以外に山西(六事例)、浙江(一事例)、河南(四事例)、陝西(二〇事例)、山東(二三事例)、遼東(二〇事例)の諸事例が含まれているとはいえ、それぞれの地域の在外衛所から選抜されたのは、大体において靖難の役後配置転換された旧燕王軍であったものが多かったのである。上記の山西(六事例)、浙江(一事例)、河南(四事例)、陝西(二〇事例)、山東(二三事例)、遼東(二〇事例)において、靖難の役期の所属衛所を明記した事例はさわめて少ないがその事例を示すとつぎの通りである。

○山西

①劉玉 宛平県(北直隸)の人・大興左衛小旗↓鎮西衛副千戸〔燕山左衛選簿〕『明朝檔案』第七一冊、二七六頁、劉玉の条

○河南

②張灰 蘄州(湖広)の人・永平衛副千戸↓宣武衛指揮僉事〔柳州衛選簿〕『明朝檔案』第五八冊、二五〇頁、張表の条

○陝西

③張成 来安県(南直隸)の人・永平衛小旗↓岷州衛百戸〔興武衛選簿〕『明朝檔案』第六五冊、二二〇頁、張欽の条  
④王洪 昌平県(北直隸)の人・義勇左衛総旗↓永昌衛副千戸〔蔚州衛選簿〕『明朝檔案』第七〇冊、二五八頁、王朝臣の条

⑤鄭得 通州(北直隸)の人・錦衣衛正千戸↓甘州右衛指揮僉事〔鎮西衛選簿〕『明朝檔案』第七一冊、一九五頁、鄭天相の条

⑥ 韓貴 安平県（北直隸）の人・燕山右護衛指揮同知↓陝西行都司都指揮僉事（『南京豹韜衛選簿』（『明朝檔案』）第七四冊、五頁、韓功の条）

○山東

⑦ 羅進 贛県（江西）の人・通州衛総旗↓青州左衛百戸（『通州衛選簿』『明朝檔案』第五二冊、三六六頁、羅錦の条）

⑧ 王貴 山後望平県の人・通州衛総旗↓平山衛副千戸（同右書、五〇一頁、曹英の条）

⑨ 曹栄 六安州（南直隸）の人・通州衛総旗↓登州衛百戸（同右書、四四七頁、王体益の条）

⑩ 賈貞 大興県（北直隸）の人・義勇左衛総旗↓鰲山衛副千戸（『龍驤衛選簿』『明朝檔案』第六三冊、一頁、賈孔の条）

⑪ 蘇整 大興県（北直隸）の人・義勇左衛総旗↓青州左衛百戸（同右書、八二頁、蘇鎮の条）

○遼東

⑫ 教均美 広寧府（遼東）の人・通州衛総旗↓定遼前衛副千戸（『通州衛選簿』『明朝檔案』第五二冊、四三九頁、教讓の条）

⑬ 馬栄 遷安県（北直隸）の人・永平衛指揮僉事↓広寧左屯衛指揮同知（『永平衛選簿』『明朝檔案』第六七冊、一九七頁、馬承徹の条）

北直隸以外の永楽八年（二四一〇）の役と旧燕王軍との関わりを示す事例は、以上のようにわずか一三事例しか検出できなかったが、この僅少な事例だけでも顕著な特徴がみえる。かれらの出身地は北直隸のみに限定できないが、配置転換直前の所属衛所は、いずれも北直隸であったということである。靖難の役終息以前の都司―衛所関係でいえば、

北平都司

永平衛……………②、③、⑬

通州衛……………⑦、⑧、⑨、⑫

北京行都司

大興左衛……………①

北平三護衛

燕山右護衛……………⑥

燕王私設

義勇左衛……………④、⑩、⑪

親軍衛

錦衣衛……………⑤

という内訳になる。④、⑩、⑪の義勇左衛は靖難の役後の衛所改革によって後府の京衛に昇格するが、もとは燕王が燕王軍の兵力増強のために私的に設置した衛所であった。<sup>20</sup>⑤の錦衣衛は無論首都南京の親軍衛の一つであるが、錦衣衛正千戸から甘州右衛指揮僉事に陞進して配置転換された鄭得は、『鎮西衛選簿』（『明朝檔案』第七一冊、一九五頁）の鄭天相の条に、「鄭得、通州の人、洪武十年錦衣衛力士に充てらる」とみえるように、もとは錦衣衛力士であった。力士は随駕・守衛を任とした。王府の儀衛司には錦衣衛からその力士と鹵簿（天子の行列）の儀仗を任とする校尉とが派遣されていたのである。そのため錦衣衛の力士・校尉が燕王軍として靖難の役に活躍した事例は数多くある。<sup>21</sup>通州を出身地とする<sup>21</sup>鄭得はその出身地が考慮されて燕王府に派遣されていて、燕王の拳兵に従行したのである。

### おわりに

以上、永楽八年（一四一〇）と北直隸の在外衛所との関わりについて種々考察した結果、それを簡単にまとめる

と、つぎのようになる。

- ① 永樂帝一回目のモンゴル親征軍の主戦力は、京師の親軍衛・京衛のほかは、南北直隸・山西・山東・陝西・浙江・河南・遼東などに展開する旧燕王軍であった。
- ② 南直隸・山西・山東・陝西・浙江・河南・遼東の在外衛所からモンゴル親征軍に選拔された衛所官軍は、靖難の役以前からその地に在住していたものたちではない。
- ③ かれらは燕王に随行して靖難の役を戦ったが、それが終息すると、それぞれの都司所属の在外衛所に配置転換されて移衛してきたものたちである。

④ かかる配置転換による移衛は、永樂帝が建文政權軍を支えていた地域の軍事力を取り込むためであった。

⑤ 永樂八年（一四一〇）のモンゴル親征軍編制においては、京師の親軍衛・京衛から許多の衛所官が調撥されたので、北直隸の軍事防衛態勢に空洞化を招かないように、北直隸の在外衛所からの選拔は少なく、その代替的措置として、靖難の役後に南直隸・山西・山東・陝西・浙江・河南・遼東などに北直隸から配置転換された旧燕王軍が主として選拔・調撥の対象となった。

以上が、本稿の結論である。

註

- (1) 『太宗実録』永樂七年八月甲寅の条。
- (2) 同右書、永樂七年九月甲戌の条。

(3) 永樂八年(一四一〇)の役における親征軍編制において北京の親軍衛・京衛が中核をなしたことは、二〇〇一年に中国第一歴史檔案館・遼寧省檔案館編で広西師範大学出版社から刊行された『中国明朝檔案総匯』(以下、『明朝檔案』と略称)に所収された府軍前衛・錦衣衛・金吾右衛・羽林前衛・燕山前衛・通州衛などの北京親軍衛の衛選簿、留守左衛・驍騎右衛などの北京京衛の衛選簿をみれば、一目瞭然である。なお、『明朝檔案』所収衛選簿の概要については、拙著『明朝檔案が開く新地平―明代軍事・変乱史研究の新階梯―(人文研ブックレット34)』(中央大学人文科学研究所、二〇一七年)五―六頁に掲出の『中国明朝檔案総匯』所収衛選簿目録」参照。

(4) 『宣宗実録』宣徳五年六月壬午の条。

(5) 前掲『明代政区沿革綜表』「後軍都督府属京師(北直隸)在外衛所」には、通州衛が掲出されているが、これについては疑問がある。「永樂四年(一四〇六)置。『大明一統志』卷一」としている。しかしながら、『大明一統志』卷一、京師、公署にみえる通州衛の記述は、「通州治の南に在り、洪武三十五年建て兵部に隸す」としている。すぐにその設置年次に齟齬があることに気がつき、『明代政区沿革綜表』は、『大明一統志』の記述を正確に反映させていない。通州衛については、『太祖実録』洪武三年正月庚子の条に、「通州衛指揮房勝等衆を率い、城を以て来帰す」とあり、『太宗実録』奉天靖難事蹟、建文元年七月甲戌の条には、「通州衛指揮房勝等衆を率い、城を以て来帰す」とあり、通州衛の設置は洪武三年(一三七〇)年正月、靖難の役が起きると、通州衛は燕王に全城をもつて投降しており、その設置は靖難の役以後のことではない。通州衛の設置年次に関して、『大明一統志』の記述にはかかる瑕疵があるが、重要なことはその所属先を兵部としていえることである。『大明官制』京師、順天府、公署に、「州治の南に在り、経歴司、鎮撫司、左右中前後千戸所、兵部に隸す」とある。また、『明史』卷七六、職官志五には、「永樂中」に皇帝に上直する親軍衛の一つに昇格したとしている。また『大明会典』卷一二四、兵部、職方清吏司、城隍一、都司衛所、親軍衛に、「通州衛は旧安吉衛と爲す。……旧と北平都司に属す。永樂四年陸す」とあり、『明史』職官志と同じく親軍衛としている。親軍衛は侍衛上直軍とはいえず所属先が兵部であるので、通州衛が後府直隸でないことは明白なため、Aには入れていない。

(6) 『英宗実録』正統元年十二月辛巳の条。

(7) 静虜鎮はまた靖虜鎮と表記される事例もある。たとえば、『宣宗実録』洪熙元年七月丁酉の条に収録された武進伯朱榮の薨卒伝に、「武進伯朱榮卒。榮山東兗州府沂州人。洪武中選充軍衛驃騎舍人、陸総旗、從征雲南有功、陞百戸、進大寧前衛



- 副千戸。太宗皇帝靖難以功累陞至左軍都督府都督僉事。永樂四年征交趾陞右都督。八年從車駕征北虜至靖虜鎮、進左都督。後屢從征迤北、勦戮胡寇、以功封奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國武進伯食祿米一千二百石、子孫世襲。二十二年從征至龍虎岡還、奉命佩征虜前將軍印、鎮守遼東。至是卒、計聞、遣官賜祭、賻贈有加、追封武進侯、諡忠靖。子冕襲伯爵」とあり、靖虜鎮に作っている。
- (8) モンゴル人に対する漢語の稱謂については、拙稿「土木の変における在華モンゴル人の衛所官軍について」(『人文研紀要』第九一号、二〇一八年)一七六頁、参照。
- (9) 衛選簿において、それぞれの家の世襲状況を記述するにあたっては古い世襲記録は内黄と外黄からなる黄簿を参看している。内黄と外黄の中、いずれを参照したかを示しているのが、「内黄査有り」あるいは「外黄査有り」という文言である。ちなみに、黄簿の中、内黄は内庫の銅置中に収められ、外黄は印綬監が収掌していた。『太祖実録』洪武五年正月戊辰の条、『万曆野獲』卷五、左右卷内外黄、『菽園雜記』卷一〇、参照。
- (10) 招募については、拙稿「燕王軍の招募と華北の人々―靖難の役における燕王軍兵力の供給源に関して―」(妹尾達彦編著『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会』中央大学出版部、二〇二〇年)参照。
- (11) 武成後衛は後に茂陵衛に改編された。茂陵衛が付設された陵墓は明朝第九代皇帝憲宗成化帝の茂陵である。在位二十三年、寿四十一で崩御した憲宗がここに葬られたのは、成化二十三年(一四八七)十二月壬午(十七日)のことであった(『憲宗実録』成化二十三年是月の条)。武成後衛が茂陵衛に改編されたのはそれより二ヶ月前の十月十三日であった(同右書、成化二十三年十月己卯の条)。
- (12) 優給舍人、新官・旧官などを含む衛所の世襲制度とその運用については、拙著『明代中国の軍制と政治』(国書刊行会、二〇〇一年)前編第二部「第五章 新官と旧官」、「第六章 借職制」参照。優養制については、前掲拙著『明代中国の軍制と政治』前編第二部「第七章 優養制」参照。
- (13) 故都指揮僉事王觀童とは、『太宗実録』洪武三十五年十月壬子の条に、「神策衛指揮同知王觀童・驍騎右衛指揮僉事梁北斗奴を陞して俱に北平都指揮僉事と為し、指揮僉事戴彬・劉徴は俱に錦衣衛指揮同知と為す」とされている神策衛指揮同知で靖難の役後北平都指揮僉事に陞進した人物のことである。
- (14) 永樂八年(一四一〇)の役に関する衛選簿の表記では、北直隸の在外衛所だけでなく、親征軍に編制された親軍衛・京

衛などの衛所官軍の事例においても、阿魯台や本雅失里を殺敗したという記述が許多ある。それは贅言する必要もないことであるが、阿魯台や本雅失里その人を殺敗したという意味でなく、阿魯台、本雅失里の軍兵を殺敗したということである。阿魯台はこの戦役から三年後の永楽十一年（一四一三）七月一日に永楽帝から和寧王に封じられている（『太宗実録』永楽十一年七月戊寅朔の条）。また本雅失里については永楽十年（一四一二）五月に、順寧王馬哈木等が知院海答兒等を遣わして「既に本雅失里は滅び、その伝国の璽を得たので使いを遣わして進献したい」と言わしめている（同右書、永楽十年五月乙酉の条）。さらに前掲『明史』韃靼伝には、「十年、馬哈木、遂に本雅失里を攻殺す。復た上言して故元の伝国の璽を獻せんと欲す」とあり、本雅失里は永楽十年（一四一二）オイラトの馬哈木（マムード）に殺されたのであった。したがって永楽八年（一四一〇）の永楽帝のモンゴル親征以後もなおしばらく命を長らえていたのである。

(15) 拙稿「燕王の拳兵と燕山三護衛―燕山右護衛復原の試み―」（『中央大学文学部紀要』史学第六六号、二〇二二年）参照。

(16) 拙稿「角逐―燕王軍と遼東軍」（『人文研紀要』第一〇〇号、二〇二一年）参照。

(17) 拙稿「靖難の役後の遼東と燕王軍」（『中央大学文学部紀要』史学第六七号、二〇二二年）参照。

(18) 旧燕王軍とはみとめられないのは、遼東三万衛の裴牙失帖木兒（女真人）と陝西平涼衛の哈刺喀咄（海羅県の人）の事例である。三万衛の裴牙失帖木兒は一貫して三万衛所属で靖難の役に関わる記事はない（『三万衛選簿』『明朝档案』第五冊、一三九頁、裴承祖の条）。また遼東の諸衛が建文軍に付して反燕王であったことを勘案しても裴牙失帖木兒が燕王軍であった可能性は皆無である（なお靖難の役期における遼東軍の動向については本稿註16の拙稿を参照）。また平涼衛の哈刺喀咄の場合は「洪武」一五年平涼衛中所を襲ぎ、永楽八年征に随いて功有り副千戸に陞せらる」と『平涼衛選簿』（『明朝档案』第五六冊、一八九頁）に記されているだけで、靖難の役に関わる記述は全くない。

(19) 『太宗実録』奉天靖難事蹟、建文二年正月丙寅朔の条。

(20) 靖難の役期に燕王が設置した私設の衛所群は、前掲拙稿「燕王軍の招募と華北の人々―靖難の役における燕王軍兵力の供給源に関して―」参照。

(21) 燕王府の力士・校尉については、拙著『明代建文朝史の研究』（汲古書院、一九九七年）第八章「靖難の役と衛所官―燕王麾下の衛所官―」参照。